



神奈川県

# さがみはら若者サポートステーション

「働くこと・生きること」を実感し模索する集中訓練プログラム

## サポステ基本情報

運営団体名	認定 NPO 法人 文化学習協同ネットワーク
スタッフ数	常勤 6 人 非常勤 3 人

## 取り組みのポイント

### ① 取り組みのねらい・ポイント

さがみはらサポステの集中訓練プログラムは、農業体験を訓練の軸に、通所型で実施している。ほとんどの若者にとって農業は、「職業」や「就職」といったイメージとはかけ離れた世界である。訓練内容も農業中心であり、例えばPCスキルの習得といった、就職後に直接役立つカリキュラムも多くはない。しかしながら、さがみはらサポステの集中訓練を修了した者のほとんどは、自ら今後の進路についてヒントを見出し、次のステップに進んでいくことができるようになる。

サポステを訪れるすべての若者の、悩みの本質は「どう、幸せによりよく生き（られ）るか」ということである。一方、相談初期に一樣に語られる言葉は「働かなければ」だ。彼らにとって「働く」とは「企業への就社」であり「そうしなければならぬこと」。

「就社すること」が「よりよく生きること」へとつながるイメージを持ってないばかりか「それができない自分が悪いし努力が足りない」「それができない自分には価値がない」「そんな自分を受け入れてくれる社会なんてない」とすら考えている。

働くイメージを持ってない、あるいは自信がない、働くことに不安なのは、何も自己理解や職業理解等が不足しているからだけではなく、本来的な意味での“働く”ことと“生きる”こととが、実感として結びつかないことが、ひとつの課題であると考えている。

農業を軸とした集中訓練プログラムは、この課題に取り組むべきものである。

### ② 取り組みの具体的な内容・方法・効果

#### 農作業実習

作業内容は常に移り変わる。畑を耕す時期、種まきや育苗の時期、除草や水やり、間引きなどをする時期、収穫期。天候・気候にも左右されるため、仕事の性質やポイントも多種多様。個人での地道な繰り返し作業からチーム作業、また体力作業から、手先を使う細かい作業まで。じっくり取り組むものや、スピード勝負なものも。農作業はそのような実践的な仕事力を養うために重要な要素がたくさん詰まっている。実習生は農作業を通して、自然に得意不得意や、好き嫌いといったことに向き合い、自己を理解するきっかけになると共に、生活や仕事をする感覚を養っていくことができる。

#### グループワーク/コミュニケーション訓練

農作物の加工品づくりやレシピ開発～試食、商品販売体験までを共同作業で行う。工・商・サービス業分野に近い実践に取り組み、密なコミュニケーションが必要な状況も増えるため、考えの言語化や意思表示、意見交換の力を育むことができる。

#### 社会参加訓練/職場実習

近隣の協力農家さんで、農作業の手伝いから始め、地域おこしをしている方、加工場等の周辺産業での実習等へと、幅を拡げていく。

「食と農」を1つのきっかけに、自分自身でつくった作物の、その後の行方や周辺産業を、実習を通して知ること、実感とイメージをもって様々な職業に触れ、考える機会を得る。またその過程で、「就社」だけではない、様々な価値観や働きかた、生きかたに出会い、職業に関する視野も広がっていく。

## 成果発表、アフターケア

訓練期間の中間と、訓練終了時の2回、活動発表会を開催。自身が取り組んできた訓練について振り返り、それを他の利用者へプレゼンテーションする。

自分自身の成長や成果を言語化して、他者へ発信することで、その意味を再確認すると共に、それを聞いた若者から、直に言葉を返してもらえることで、自分自身や社会に対する信頼感が回復していく。

また、訓練終了後も、社会参加訓練で知り合った、地域の方々とのつながりは残る。

必ずしも「訓練が修了したから、さあこれからは就職活動だ」と切り替えていく若者ばかりではなく、修了後も地域とのつながりを保ちながら、またサポステ職員以外の人と交流し話す機会も持ちながら、ゆるやかに社会へと出ていくための基盤となっていく。

### ③ 実施上の留意点

訓練段階に応じて、以下の点に留意、目標として実施している。

1. 初期
  - ・ 毎日の安定した通所
  - ・ 終日活動できるようになり体力をつけること
  - ・ 個人作業中心で、簡単な農作業をこなすこと
  - ・ 自然環境に慣れ親しみ、その心地良さ・悪さを体感すること
2. 中盤
  - ・ 合宿により生活実感と生活を通じた共同作業を経験することで、訓練生同士の関係性を築くこと
  - ・ 農作業の大変さを知ると共に、楽しさや充実感といった感覚の獲得
  - ・ 自らの行動（アクション）が、作物の成長や収穫等により、ダイレクトに還ってくる（リアクション）経験と実感を得ること。それによって芽生える感情を大切にすること
  - ・ 感じている感覚や考えを、言語化すること
3. 後半
  - ・ 訓練生同士の共同作業を通じて、自然環境に対してだけでなく、他者やコミュニティとの関係性を結ぶこと
  - ・ 他者や地域社会との関わりを通じて、多様な価値観や生きかたを知ること視野を拡げ、自身の生きかたや働きかたについて考えていくこと
4. 終盤
  - ・ 様々な外部研修を通じた、実践的な仕事力の習得
  - ・ 多くの社会人と出会いロールモデルを得、今後の進路について実感イメージを伴って考えていけるようになること
  - ・ 訓練期間を振り返り成長を確認、その意味・意義を言語化し捉えなおすこと
  - ・ 発表会を通じて他者へ発信し、それに対して他者からねぎらいや感想等の言葉をもらうことにより、取り組みの意味を再確認すること
  - ・ 訓練終了後も、地域の方々や緩やかにつながりを持ちながら、ゆるやかに社会へと移行していくこと

## 取り組みの成果と今後の課題

ねらいにも記した通り、訓練を修了した若者は、確実に力をつけ、次のステップへと踏み出していくことができるようになった。

訓練生の中には、外部研修を通して、自身の生き方について見つめなおし、「食と農」問題に興味を持ち、就農を目指す者が表れたり、地域おこし協力隊といった活動に参加するといった、「会社への就職」という一様な働きかたではなく、「生きかた」という観点から、自身の働くことを考え、次の人生を踏み出している。

サポステを利用している多くの若者が、コミュニケーションの苦手さを訴え、就職時にも接客・サービス業を志望する者は少ないが、集中訓練プログラムに参加したことで、食を通して人に喜んでいただけることに新たな価値を見出し、飲食業へ進んだ若者もいた。

一方で、やはり「農業」を中心とした集中訓練は、立地や環境、訓練内容面から敬遠されることも多く、訓練の意義や効果についても、伝わりづらい点が課題である。

これに対しては、訓練OB、OG生からの講話や発表会の形で、当事者から当事者へ直接メッセージを届けることで、先輩からの言葉に刺激されて参加する若者も出るようにはなったが、まだまだ訓練生が毎回充分に集まる状況とは言い難いため、今後も工夫していきたい。